

中年期の母親における「個人としての生き方」への態度

文京女子大学 永久ひさ子
文京女子大学 柏木 恵子

Attitude of 'Individual Living' in Middle aged Mothers

Shirayuri College NAGAHISA, Hisako
Shirayuri College KASHIWAGI, Keiko

本研究では、中年期の母親における家族観と、母親の時間や心的エネルギーなどの資源の配分対象との関連を検討した。130名の大学生の母親を対象に質問紙調査を行った。家族観は、母親自身を家族と一体の存在と捉える[一体感]と、家族とは独立の個人としての心理的領域を認める[個人領域]の2つの軸から構成されていた。資源配分の対象は、[個人としての生き方]と[家族の関係性の構築・維持]の2つの軸から構成されていた。家族観と資源配分の関係は、[一体感]が強いほど[家族の関係性の構築・維持]への資源配分が多く、[個人領域]が強いほど[個人としての生き方]への資源配分が多かった。家族への道具的サポートの提供が家族の関係性の構築・維持に不可欠との考え方は高学歴になるほど弱まること示唆された。また、家計費高負担群では[一体感]と関連するのは情緒的サポートなのに対し、低負担群ではより時間的拘束が長い道具的サポートも関連していた。女性の高学歴化と有職化は、家族に配分する資源を時間資源から心的エネルギー資源へと変化させ、母親が個人としての生き方により多くの時間資源を配分することを可能にすることが示唆された。

【キー・ワード】 中年期の母親、家族観、個人資源の配分、個人の生き方、家族の関係性の構築・維持

The purpose of this study is to analyze the relationship between the family values of middle-aged mothers and objects of personal resource distribution through a questionnaire administered to the mothers of 130 university students.

It was found that the more the mother associated herself with the family, the amount of resources spent on "building and maintenance of family" increased and that distribution to "personal time" was positively correlated to "the sense of individual being".

It was also found that as the mother increased financial contributions to the household, the "sense of belonging" was related more to emotional care, while in mothers with less input, more time-consuming chores were associated.

The multitude of choices females have has changed the pattern of resource distribution to families from traditional time-related roles to more emotionally-related ones. This change has

also made it possible for mothers to distribute more resources into opportunities for a personal lifestyle.

【Key Words】 Middle aged mothers, Family values, Personal resource distribution, Individual living, Building and maintenance of family

問題と目的

少子化、育児不安の増加、中高年離婚の増加など、近年言われる家族をめぐる変化は、その多くが女性における問題、つまり母親にとっての家族・子どもの意味の変化に関わるものである。このことは、近年の社会の変化が、家族の中でもとりわけ女性の側に大きな変化をもたらしたことを示唆していよう。家族に関する様々な問題の対処には、その背景となっている女性の心理的变化への理解が不可欠である。社会の変化によって、女性の何がどのように変化したのか、どのようなことがこれまでの家族のあり方と不適合になっているのかを検討することが重要であろう。

少子化、育児不安の増加、中高年離婚の増加など、近年言われる家族をめぐる変化は、その多くが女性における問題、つまり母親にとっての家族・子どもの意味の変化に関わるものである。このことは、近年の社会の変化が、家族の中でもとりわけ女性の側に大きな変化をもたらしたことを示唆していよう。女性はこれまで、多くの時間やエネルギーを家族・子どものために使い、関係性を構築・維持してきた。近年の家族の変化は、女性の持つ時間やエネルギーをどのような対象にどのくらい配分するか、という資源配分の変化として捉えることができるのではなかろうか。社会の変化が女性の資源配分をどのように変化させたのかをみることで、女性における家族の意味の変化を見ることができよう。

少子化と長寿命化という人口革命は、女性の生き方を大きく変えた。次々と生まれる子どもを育てるために母親の時間とエネルギーの大半を注がねばならなかった状況から、母親の望む生き方に見合った子ども数にすることで、女性は子育て以外のことに時間やエネルギーを向けることが可能になった。また、子育て後の期間が延長したことから、母親役割が縮小する子育て期後期には、その後約30年ほどの人生をどのように生きるかを考え、それまで母親役割を生き方の中心にしてきた女性でさえも、母親役割以外の個人として生き方を持つことが重要になった（柏木，1999；岡本，1999；杉村，1993）。さらに家電製品や既製品の普及は家事労働にかかる時間を減少させた。家族役割の減少は今日の女性に、子育て以外のことに向けることができる時間やエネルギーをもたらした。一方で、戦後の産業構造の変化と高学歴化は女性の就業機会を増大させ、生き方の選択肢を多様にした。生き方の選択肢の多様化は、自分の能力、個性、適性など個人としての自分への関心を強めると考えられる。今日の女性には、時間やエネルギーを向ける対象としての、個人としての自分への関心が強まっているのではなかろうか。

このような変化は、とりわけ母親役割が縮小する中年期の女性に、妻・母親役割以外の生き方への関心を高めると考えられる。中年期女性の人格発達の研究において、母親としての発達以外の個人としての発達を問題にすることが必要であろう。

柏木・永久（1999）、永久・柏木（2000）は、女性における子どもの価値が変化しつつあること、またその変化は、母親が心理的にも経済的にも自分を家族と一体の存在と捉える傾向が弱まり、家族とは独立の個人としての時間や領域を求める傾向と関連することを明らかにした。またこの個人の世界を求める傾向は、世代、学歴、職業の有無に関らず、いずれの群でも非常に強いことが明らかになった。

しかし、母親の個人としての生き方を求める傾向がいずれの群の母親でも高いことの解釈はいろいろな可能性がある。母親が家族とは独立の個人としての生き方を持つことを一般論としては肯定しても、そのことが、家族の絆を弱めるとの考えから、自分自身に関しては消極的である場合もある。あるいは、実現の可能性が低いゆえの願望の強さである場合もある。夫婦間での家事・育児の分担に関する調査によれば、家事・育児のほとんどを担っているのは母親である（総務庁、1996）。このような状況では、個人としての時間や領域を求める傾向はあくまで価値観や願望にとどまると考えるべきではなからうか。母親が個人としての自分と家族役割とをどのような関係にあると考え、個人としての生き方をどの程度肯定するかを見るには、価値観や願望と現実の行動とを分離して測定する必要がある。

母親役割によらない個人としての生き方を、そこで有能感や効力感が得られるほどの生き方とするためには、それなりの能力や知識を獲得し、その中で関係性を構築することが重要である。そのためには個人としての生き方に相当の時間やエネルギーを使う必要がある。若い世代の多くの母親はそれを見越し、「子育ても大事だが自分の生き方も大事にしたい」と考えている（ベネッセ教育研究所、1997）。

人が持つ時間や心理的エネルギーは個人の中では有限の資源である。人はそれを、様々な対象に配分して生活している。複数の対象に同時に高い価値を認め得る価値観とは異なり、限られた資源は複数の対象に同時に多くを配分することはできない。この際、何に充分な量の資源を配分するかを決めるのは、自分にとって何が重要か、という自分の生き方についての考え方であろう。つまり、その人の資源配分をみることで、その人の生き方にとって何が重要かを知ることができるのではなからうか。

かつての女性は、子どもを持った以上、子育てに全資源を投入することが必要であった。家電製品も既製品もない時代には、家事にも子育てにも技術や知恵が求められ、家事・子育てを行う中で母親の役割は大きく、またそこからの達成感も大きかった。このように全資源の投入が余儀なくされた時代には、資源配分の対象に「個人としてのわたし」は必要がなかった。社会の変化と人口革命により、母親がどれほどの資源を子育てに配分するかを選択できるようになったことで、母親ではない「個人としてのわたし」がクローズアップしてきたといえよう。

女性の高学歴化と社会進出が進み、趣味やボランティアなど就業以外の活動も多様になった。その結果、資源配分の対象となる選択肢は格段に増えた。母親として生きる以外の選択肢の出現は、女性に、自分が家族とは独立の存在であるとの認識、母親以外の個人としての生き方を持つことへの関心を強めるであろう。

家族とは独立の個人としての生き方が明確に、また重要になるほど、そこに充分な資源を配分できないことは、女性に不満や葛藤をもたらすと推測される。近年の女性の变化、ことに母親の变化は、

有限の資源を家族と個人としての自分とにどのように配分するかという、資源配分の変化と捉えることができるのではなかろうか。多様な選択肢の中でどのような資源配分を行うかは、家族の関係性と個としての生き方という女性の人格発達の両側面のありようを、より实际的に捉える、心理学的な尺度として考えられるであろう。

子どもが青年期になり母親役割が縮小する時期は、母親にとってまさに生き方の中心を母親役割から個としての生き方へとシフトする発達の過渡期である。そこで本研究では、子育て期後期の母親について、家族における一体感と個人の領域がどのような構造であるか、家族にも個人としての自分にも資源配分ができるのはどのような場合であるかを、高学歴化と有職化の視点から検討する。さらに、母親が個人としての生き方を志向する傾向が、家族の絆を弱めるものであるか否かをあわせて検討していく。

方 法

（調査方法） 2000年5月、大学生を持つ母親248名を対象に、無記名の質問紙法による調査を行った。質問紙は学生を介して配布し、個別に郵送で回収する方式に抛った。有効回答率は52%だった。

大学生を持つ母親を調査対象としたのは次の理由に抛る。大学生を持つ母親は、子育てに実質的には手がかからなくなる時期にあたる。大学入学までは受験など子ども中心に生きてきた人でも、母親としての役割が減少し、代わって個人としての生き方を意識せざるをえなくなる。人によっては家族とは独立の個人としての生き方についての意識がより強まる可能性が高いと推測されるためである。

（調査内容） 調査内容は以下通りである。自分と家族の関係に関する家族観15項目。心理的、経済的、時間的、空間的側面において、自分を家族と一体の存在と捉えるか、家族とは独立の領域を持つ個人として捉えるかを問う項目である。これらの項目は、柏木・永久(1999)、永久・柏木(2000)で行った個人化の調査結果を再度検討し、その後個別面接などで検討された項目を追加した。当てはまらない(1点)から当てはまる(4点)までの4件法で回答を求めた。資源配分に関する15項目。時間資源や心理的エネルギー資源を、どの程度家族との関係性のために配分しているか、個としての自分のために配分しているかを、実際の行動について問う項目である。関係性は、安心できる、評価してくれる、相談できるなど、受け取る側面と、自分がそれらを提供するという側面とがある。女性の個人としての生き方と家族の関係性との葛藤では、主にこの提供する側の関係性をめぐって葛藤が生じる。そこで本研究では、提供する側からみた関係性について検討を行う。

関係性を構築・維持するためのサポートの提供には、時間・心的エネルギーなど女性自身のもつ資源を配分することが求められる。本研究では、この提供する側の関係性をより現実的に見るため、何に自身の資源を配分しているかについて検討する。家族のための資源配分は身の回りの世話など道具的世話と、話を聞く、期待に応えるなど情緒的世話から成る。そこで家族の関係性を構築・維持するためのサポートとして、これら両方の世話に関わる項目を入れた。

全くやっていない(1点)からかなりやっている(4点)までの4件法で回答を求めた。ジェン

ダー観との関連を見るため、鈴木（1987, 1991）を参考に性役割観・男女平等観を問う 17 項目設けた。当てはまらない（1点）から当てはまる（4点）までの 4 件法で回答を求めた。性役割観は得点が高いほど伝統的性役割観を肯定する態度、男女平等観は得点が高いほど男女平等観を肯定する態度を表す。フェイスシート：年齢、子ども数、学歴、職歴のほかに、家計費（住居費・教育費・レジャー費用など、家族のためにかかる費用全て）に占める妻の負担割合を尋ねた。

結果と考察

1 調査協力者の特徴

調査協力者の特徴は Table1 の通りである。平均年齢は 47.8 歳、学歴は、高卒・短大卒・大卒がほぼ 3 割ずつで、やや低学歴が多いものの学歴の偏りはあまりない。職歴はこれまでずっとフルタイム有職の者が 20%、それに対して常勤で働いた経験のない者が 40%と多い。なお、現在パートタイムで働く女性が多いが、その報酬・労働時間は一様ではない。そのため本研究では、フルタイムの職業に就く人のみを有職群とし、これまで職業に就いた経験のない人と結婚退職以降働いていない人を無職とした。

また家計費負担割合では、家計費負担率 20%未満の者が 67%で、無職群全員とパートのほとんどがここに入る。一方 41%以上負担している者は 22%で、フルタイム有職群と中断フルタイム有職群の約半数がこれに当たる。妻の家計費負担割合による分析では、妻の家計費負担割合により 20%未満の群（低負担群）と 41%以上の群（高負担群）を分類し、これら 2 群を対象に以下の分析を行う。

Table1 調査協力者の特徴

学歴	職歴						合計	
	有職	無職	パート	中断フルタイム	在宅	その他		
高校	7	12	12		5	2	12	50 39%
短大	6	12	10		3	1	11	43 34%
大学	7	17	2		1	3	4	34 27%
子ども数								
1人	4	4	2		1	3	1	15 12%
2人	11	25	12		7	2	16	73 57%
3人	4	9	10		1	1	8	33 26%
4人以上	1	3	0		0	0	2	6 5%
合計	20	41	24		9	6	27	127
家計費負担								
20%未満	2	14	20		4	6	14	60 67%
20~40%	7	0	2		0	0	1	10 11%
41%以上	11	0	0		5		4	20 22%
	20	14	22		9	6	19	90
	22%	16%	24%		10%	7%	21%	100%

（単位は人数）

これら 2 群を対象としたのは、家庭内の事柄の最終決定権は、妻の収入がゼロもしくは夫の扶養控除以内の妻と比べて、夫の扶養控除枠以上の妻の方が強くなる（博報堂生活総合研究所，1989）との報告に基づいている。

子ども数は、子ども数2人および3人が83%を占める。子ども数が家族観や資源配分と関連することは予想されるが、子ども数2人及び3人に集中しているため、本研究では子ども数との関連についての分析は行わなかった。

ジェンダー観とこれらの属性との関連をみたところ、本研究の調査対象においては、学歴との関連はみられなかった。また、職歴との関連では、有職群に比べ無職群の方が性役割観は肯定的であったが男女平等観の違いはみられなかった。また妻の家計費負担割合との関連をみたところ、家計費負担割合が高いほど、性役割観は非伝統的($r = .23$ $p < .05$)に、男女平等観をより強く支持する関係($r = .21$ $p < .05$)がみられた。

2 母親自身と家族の関係を中心とする家族観尺度

(1) 家族観の構造

ここで扱う家族観は一般的なものではなく、自分と家族の関係をどのようなものと見なすかについての家族観である。それは、資源配分には一般的家族観ではなく、自分と家族との関係をどのようなものと見なすかが関わっていると考えられるためである。

母親自身と家族の関係に関する家族観の構造を検討し、分析の軸を得るため、家族観15項目について因子分析(主因子法, promax回転)を行った。因子負荷量4.0以上で、他の因子への負荷が3.0以下という基準で因子負荷量の低い項目を除外した後再度因子分析を行った。その結果固有値1以上の2因子が得られた(Table 2)。

各因子に負荷量の高い項目の内容を見ると、第1因子は「一番いいアドバイスをくれるのは家族だ」

Table2 家族観の項目と因子パターン行列(promax回転後)

	F1	F2	
一番いいアドバイスをくれるのは家族	.736	-.257	
言葉で言わなくても夫には私の気持ちがわかる	.720	-.247	
悩み事を安心して相談できるのは家族だ	.695	-.221	
夫婦は一心同体	.676	-.389	
夫が言わなくても夫の気持ちがわかる	.631	-.154	
一番頼りになるのは家族だ	.595	-.218	
	$\alpha = .83$		
家族とは別の自分の世界がある	-.297	.729	
夫婦でも私は私	-.298	.686	
家族がいても、自分だけの自由な時間を大事にしている	-.157	.595	
夫婦でも相手に言わない部分があていい	-.286	.579	
家族からでも邪魔されたくない時間がある	-.227	.571	
家族と意見がちがっても自分の考えで行動する	-.039	.453	
	$\alpha = .76$		
二乗和	4.010	2.170	累積寄与率
寄与率(%)	33.41	18.08	51.49

因子抽出法: 主因子法

「言葉で言わなくても夫には私の気持ちがわかる」など、自分を家族と心理的に一体と捉える家族観を意味している。このことから、第1因子は「一体感」と命名した。第2因子は、「家族とは別の自分の世界がある」「夫婦でも私は私」など、家族という集団の中に、さらに家族とは独立の個人としての心理的領域があるとの内容である。社会学では、家族という私的領域の中に、さらに個人としての

私的領域を持つ傾向が強まっていることが指摘されている（例えば目黒，1987）。このことから第2因子は，家族という集団に所属しつつ家族とは独立の個人としての心理的領域を認める〔個人領域〕と命名した。各次元の信頼性を検討するため，上で得られた各次元の得点について Cronbach の係数を算出した。その結果，〔一体感〕では.83，〔個人領域〕では.76 と高い値が得られたことから，十分な信頼性があると言えよう。分析にあたっては，各次元の項目の平均点を算出し，家族観下位尺度得点とした。

自分を家族と心理的に一体と捉えることと，家族という集団に所属しつつ家族とは独立の個人としての心理的領域を認めることは2つの軸として分類できた。このことは，既婚女性と家族の関係は，一体感の強さと個人としての生き方を認める態度との2つの面から見ていく必要があることを示している。

（2）家族観の特徴

まず全体の傾向を見よう。全サンプルの家族観下位尺度得点の平均値は，それぞれ〔一体感〕3.12（.66）〔個人領域〕3.00（.67）で，有意差はみられなかった。また学歴による違いもみられなかった。これらのことから，子育て期後期の既婚女性は，自分自身を，家族と一体の存在と捉えるのと同じ程度に，家族とは独立の領域を持つ個人であると捉えていると言えよう。

女性の高学歴化と有職化は女性の様々な側面に変化をもたらしている（柏木・若松，1994）。母親の家族観にも同様の変化があるのだろうか。学歴と職業の有無を独立変数とする2要因の分散分析を行った。しかしこれらに関して有意差は見られなかったことから，2つの家族観の強さに関しては，高学歴化，有職化による変化はないといってよい。

では家族観の2つの軸の関係は学歴により異なるだろうか。学歴別に〔一体感〕と〔個人領域〕の相関をみたところ，高卒群では，〔個人領域〕と〔一体感〕の家族観は有意な負の相関関係，つまり対立関係にあったが（ $r = -.378, p < .01$ ），大卒群では，これらの間に相関関係はみられなかった。この結果は，高卒群における〔個人領域〕は〔一体感〕が弱い場合にのみ強くなること，つまり家族に対して心理的一体感を持っていない場合に個人としての心理的領域を志向する態度が強まるのに対して，大卒群は，家族は一つと考えつつ一方で家族とは別の個人としての心理的領域をも志向する傾向があることを示している。

男性は外で稼ぎ女性は家の中のことに責任を持つべきとの伝統的性役割観や，女性は嫁・妻・母として役割を優先すべきとの伝統的家族規範は，母親が家族とは独立の個としての世界を志向する態度とは相容れない。このような価値観の元では，家族への信頼感や帰属感が強いほど，母親が個としての生き方を志向する態度には否定的であろう。そこで，ジェンダー観と家族観との関連を検討した。その結果，〔一体感〕は性役割観と（ $r = .19, p < .05$ ）〔個人領域〕は男女平等観と（ $r = .19, p < .05$ ）の間に有意な相関がみられた。伝統的性役割観が強いほど家族の心理的一体感を強く認め，男女平等観が強いほど家族の中で個人としての心理領域を持つことを肯定する傾向があることが明らかになった。

前述のように有職化による家族観の違いは見られなかった。しかし女性の有職化というだけでは，その心理的意味合いが曖昧である。女性の経済的地位によって家族観が変化するというデータもある（平山・柏木，2001）では妻の家計費負担割合によって家族観は異なるだろうか。家族観2次元の

平均値を妻の家計費高負担群と低負担群とで比べた結果，[一体感]では有意差はみられなかったが，高負担群は低負担群に比べ，[個人領域]が有意に高かった（平均値：低負担群 2.85(.59)，高負担群 3.16(.51), $p < .01$ ）。このことから，家族の一体感は女性の高学歴化，有職化によっても変化しないといつてよい。しかし個人領域を志向する態度は，妻の家計費負担割合による家庭における経済的地位によって強まることが示唆された。

これに関連して次のような先行研究がある。妻自身のこと（妻の夜の外出や妻の旅行，妻の門限，妻が働きに出ることなど）に関して家族の誰とも相談せずに決定する自由裁量の割合は，家計費を夫婦で均等に分担している群が最も高く，全く分担していない群が最も低いという報告（博報堂生活総合研究所，前出）や家計費負担割合と家庭内での権力とが関連するとの報告がある（木村，2000）。これらを考え合わせるならば，[個人領域]が妻の家計費負担割合の多い群で強まるのは，この群で自分のことを自ら決定する自由裁量が強まることによると推察される。本研究の結果も，それらと一致する結果である。

3 資源配分

(1) 資源配分の構造

次に，母親が自分の持つ時間資源や心理的エネルギー資源を，どのようなことに配分しているかをみていこう。既婚有子女性の資源配分の構造を検討し，分析の軸を得るため，日常の活動について質問した 15 項目について主成分分析及び varimax 回転を行った（Table 3）。因子負荷量 4.0 以下の項

Table 3 資源配分に関する因子分析 (varimax 回転後)

	F1	F2	
個性や能力を活かした活動をする	.854	-.018	
自分の目標のための準備をする	.770	-.018	
趣味・習い事・スポーツをする	.671	.014	
自分の意見や考えを表現する	.666	.098	
$\alpha = .73$			
夫・妻の世話をする	-.137	.814	
夫・妻の期待に応える	.200	.695	
夫・妻の話をきく	-.010	.680	
親からの期待に応える	0.200	.563	
子どもの世話をする	-.094	.523	
$\alpha = .68$			
二乗和	2.410	2.125	累積寄与率
寄与率 (%)	26.78	23.61	50.38

因子抽出法: 主成分分析

目及び，他の因子に 3.0 以上の負荷がある項目を除外し，再度因子分析を行った。この過程で，「子どもの教育をする」「よい母親であろうとする」など子育てに関する項目及び「家の外で仕事をする」は，両因子に負荷が高かったため除外した。また，「家族以外の人世話をする」など家族以外のための資源配分は因子としてまとまらなかったため除外した。

その結果，固有値 2.0 以上の 2 因子が得られた。第 1 因子に負荷の高い項目は「個性や能力を活かした活動をする」「自分の目標のための準備をする」など，個人としての自分の生き方のための資源配分であることから，[自分の生き方に配分]と命名した。第 2 因子に負荷の高い項目は「夫の身の

回りのサポートをする」「夫の話を聞く」「子どもの身の回りの世話をする」など、夫・子どもの身の回りの道具的サポートや情緒的世話など家族との関係性の構築・維持のための資源配分であることから、[家族の関係性に配分]と命名した。信頼性を検討するため、Cronbach の係数を算出したところ、第1因子が $\alpha = .73$ 、第2因子が $\alpha = .68$ だった。分析にあたっては、各次元それぞれの項目の得点を足し合わせた後項目数で割ったものを、資源配分下位尺度得点とした。

家族の世話は女性としての能力や特性が活かされる仕事であるとの思いや、家族の情緒的なケアに力を注ぎ家族の関係性を構築することは母親自身の目標でもあるはずとの思いは、男性ばかりでなく女性の中にもある（朝日新聞、1998年11月25日「専業主婦の憂うつ」、11月26日 同反論特集；読売新聞、2001年2月16日、「変わる家族像・結婚観」）。しかし資源配分が、家族との関係性への資源配分と自分の生き方への資源配分の2因子であったことから、家族の道具的・情緒的世話など家族への資源配分と、母親自身の目標への投入など自分への資源配分とが2つに分離でき、母親は資源配分の対象を2つの面から捉えていることが明らかになった。

しかし子育てについてはこれとは異なる。因子分析の過程で、「子どもの教育をする」「いい母親であろうとする」は2つの因子にわたって高い負荷があったため、どちらに入れることも曖昧になると判断し除外した。このことは、母親にとって子育てが、家族との関係性の構築・維持のための資源配分の側面と、自分の生きがいや達成のための資源配分の側面を持つことを示唆している。いずれにせよ、両因子にわたって高い負荷があったため、これらの項目は除外した。

(2) 資源配分の特徴

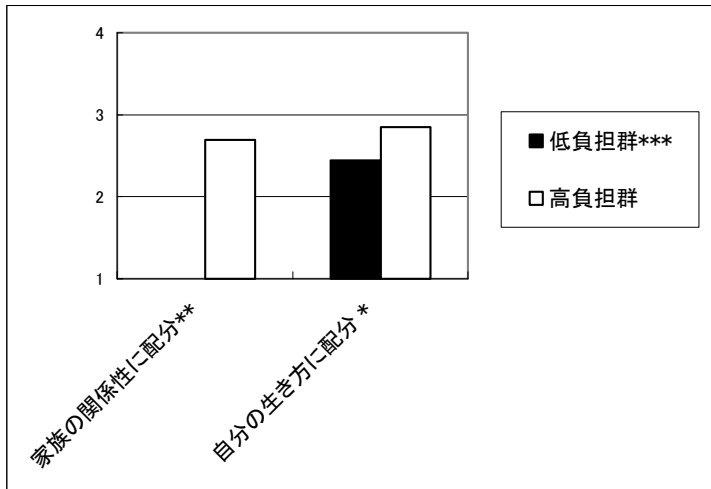
まず全体的な資源配分の傾向を見よう。[自分の生き方に配分]と[家族の関係性に配分]の平均値を比較したところ、[家族の関係性に配分]の方が有意に高く(平均値:[自分の生き方に配分]2.54(.66), [家族の関係性に配分]3.07(.48), $p < .001$)、母親は全般的に、個としての自分よりも家族のために有意に多くの資源を配分していることが明らかになった。先に見た家族観では、[一体感]と[個人領域]との間に有意差がなく、両方の志向性は同程度であったにも関わらず、資源配分は同等にはなされていない。このことから [個人領域]を志向してもそれに応じた資源配分は実現されていないことが推測される。

女性の高学歴化・有職化との関連をみるため、学歴と職業の有無を独立変数とする2要因の分散分析を行った。その結果[家族の関係性に配分]に職業の有無の主効果がみられ、無職群は有職群に比べ有意に高かった(平均値:無職群 3.14(.093), 有職群 2.79(.129), $F(1,41)=5.00$, $p < .05$)。しかし[自分の生き方に配分]にはいずれの効果もみられなかった。このことから、子育ては既に終わっている上無職で時間資源にも心的エネルギー資源にも余剰資源があると思われる場合でも、それは主に家族の関係性に配分され、自分個人の生き方への配分はあまり増えないことが示唆される。また学歴の主効果はみられなかった。

次に妻の家計費負担割合との関連をみてみよう。家計費高負担群と低負担群間の平均値の差をみたところ、[家族の関係性に配分][自分の生き方に配分]ともに有意差が見られ、低負担群は高負担群よりも[家族の関係性に配分]は有意に高く(平均値:低負担群 3.15(.515), 高負担群 2.69(.583), $p < .01$) [自分の生き方に配分]は有意に低かった(平均値:低負担群 2.44(.683), 高負担群 2.85(.710), $p < .05$)

この結果から、家計費高負担群は低負担群よりも、家族の関係性への配分は少なく、自分の生き方への配分は多いことが明らかになった。ではこのことは、高負担群は家族の関係性の構築・維持よりも自分の生き方を優先することを意味するのだろうか。家計費負担割合別に資源配分のバランスを比べてみよう(図1)。

その結果家計費低負担群は、[家族の関係性に配分] [自分の生き方に配分]の間に有意差がみられ、[家族の関係性に配分]の方が有意に高い。一方高負担群では、[家族の関係性に配分] [自分の生き方に配分]の間に有意差はみられなかった。



* p<.05 ** p<.01

図1 妻の家計費負担割合別 家族の関係性の構築・維持 と 自分の生き方への資源配分

つまり、家計費低負担群は自身の資源の多くを家族の関係性の構築・維持に配分し、自分個人としての生き方への配分はそれに比べ有意に少ないが、家計費高負担群では、家族にも自分の生き方にも同じように配分していることが明らかになった。

家計費高負担群は低負担群に比べ自分の生き方に配分する資源は有意に多い。しかしその量は、この群が家族に配分している量と変わらず、自分のことを家族よりも優先にしているとは言えない。母親の家計費負担割合が増し自身の資源配分における裁量度が強まることで、母親は家族の関係性と同程度に自分の生き方も大事にできる、ということなのではなかろうか。

では資源配分はジェンダー観とはどのような関係にあるのだろうか。ジェンダー観との関連をみたところ、[自分の生き方に配分]は、伝統的性役割観とは有意な負相関($r=-.22$ $p<.05$)、男女平等観とは有意な正相関関係($r=.19$ $p<.05$)にあった。しかし [家族の関係性に配分]はこれらのジェンダー観との関連はみられなかった。この結果から、母親の資源配分は、どのようなジェンダー観を持とうとも、家族の関係性の構築・維持のために多くの資源配分がなされる点では変わりなく、非伝統的性役割観を持ち、男女平等観が強い場合に個人としての生き方への資源配分が可能になることが示唆された。

4 家族観と資源配分との関連

(1) 全体的にみた家族観と資源配分との関連

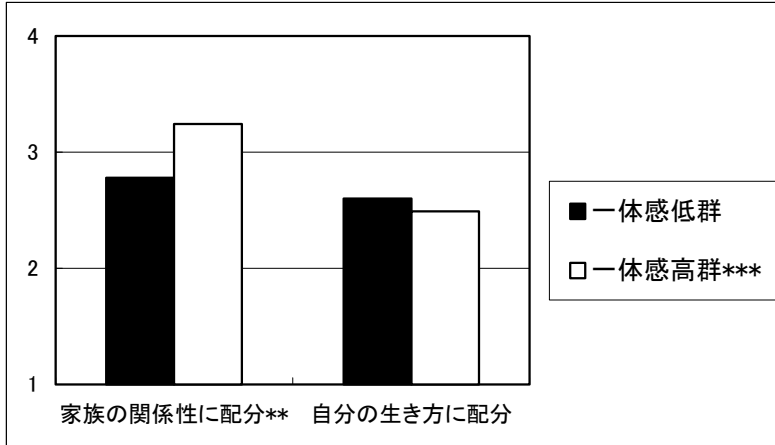
仕事であれ趣味やボランティアであれ、母親役割以外の個人としての生き方を子育てに代わるほど重要な領域にするためには、相当な資源をそこに投入する必要がある。家族とは別の個としての生き方を肯定する [個人領域]の家族観によってはじめて、母親は、個としての自分への資源配分ができるようになるのではなかろうか。

では資源配分は家族観とどのような関係にあるのだろうか。家族観と資源配分との相関を見てみよう。調査協力者全体の家族観と資源配分との相関をみたところ、[一体感]は[家族の関係性に配分]と有意な正の相関関係にあるが ($r=.351, p<.001$) [自分の生き方に配分]との相関はみられなかった。また[個人領域]は、[家族の関係性に配分]と有意な負の相関関係に($r=-.239, p<.01$)、[自分の生き方に配分]とは有意な正の相関関係($r=.361, p<.001$)にあった。この限りでは、各々の家族観と資源配分は一致した方向にあるといえる。つまり[家族の関係性に配分]は家族の一体感を強めるための資源配分、[自分の生き方に配分]は、家族とは独立の個人としての世界を充実させるための配分と解釈できよう。

では、個人の中での資源配分バランスはどのようなであろうか。2つの家族観の高群低群間(上位25%と下位25%)¹の資源配分を比較してみよう。[一体感]低群は [家族の関係性に配分]と[自分の生き方に配分]がほぼ同程度であるのに対し、[一体感]高群の[家族の関係性に配分]は[自分の生き方に配分]よりも有意に高い(図2)。次に[個人領域]についてみると、高群は低群よりも[自分の生き方に配分]が有意に高く、[家族の関係性に配分]が有意に低い。また個人の中での資源配分バランスをみると、低群は[家族の関係性に配分]に比べ[自分の生き方に配分]が有意に少ないのに対し、高群は両者に同程度に配分している。しかしそれは家族よりも自分のことに優先的に資源を配分しているわけではなく、個人の中では[家族の関係性に配分]と同程度に [自分の生き方に配分]しているに過ぎない(図3)。

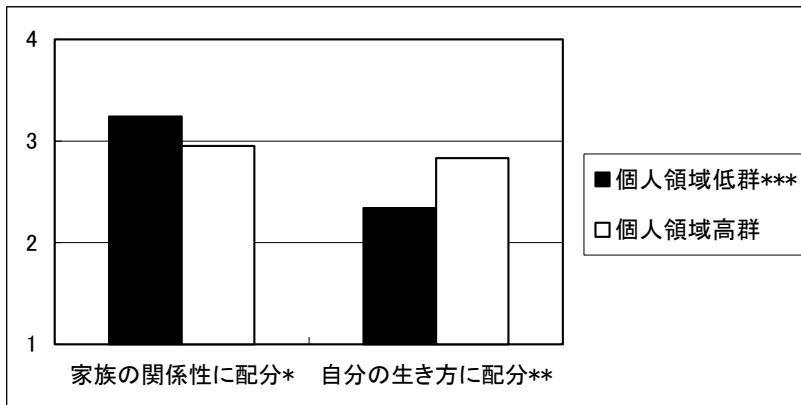
このように子育て期後期の母親が[自分の生き方に配分]する資源は、[自分の生き方に配分]が高い[個人領域]高群でも、[家族の関係性に配分]の平均値には及ばない。また前述のように [自分の生き方に配分]が高い家計費高負担群の平均値ですら、[家族の関係性に配分]の平均値と違いがなかった。これらの結果は既婚有子女性が、自身の資源を自分の生き方に配分する難しさを示しているといえよう。

¹ 一体感高群 3.67 以上 低群 2.33 以下 個人領域高群 3.50 以上 低群 2.55 以下



**p<.01

図2 一体感高群低群における資源配分のバランス



* p<.05 ** p<.01

図3 個人領域高群低群における資源配分のバランス

(2) 学歴による家族観と資源配分の関連の違い

伝統的価値観への態度は、高学歴の母親で否定的になることが報告されている(柏木・蓮香, 2000; 若松・柏木, 1994; 大日向, 1988)。このことは、家族観と資源配分の対応が学歴により異なることを予測させる。そこで家族観と資源配分との関連を、学歴別に検討した。その結果、家族観と資源配分の間には学歴により異なる相関関係がみられた (Table4)。まず高卒群から見ていこう。[一体感]と[家族の関係性に配分]とは有意な正の相関関係にあるが、[個人領域]と[自分の生き方に配分]との間に関連は見られない。一方大卒群について見ると、高卒群とは逆に、[一体感]と[家族の関係性に配分]の間に有意な相関関係は見られず、[個人領域]と[自分の生き方に配分]との間に有意な正の相関関係が見られた。

Table4 全体・学歴別 家族観と資源配分の相関
(値は相関係数)

	一体感	個人領域
家族の関係性	.279	-.062
に配分	.511***	-.232
自分の生き方	-.285	.606***
に配分	.067	.132

p<.01 *p<.001

注:上段は大卒、下段は高卒

この結果から以下のことが明らかになった。高卒群では、自分を家族と一体と捉える家族観は家族の関係性の構築・維持への資源配分を強めるが、家族とは独立の個人としての領域を認めても、個人としての生き方への実際の資源配分を増加させることはない。一方大卒群は、自分を家族と一体と考えることが必ずしも家族の関係性の構築・維持への資源配分を増加させることはなく、家族とは独立の個人領域を認める態度は個人としての生き方への資源配分を増加させていた。

学歴により、家族観と資源配分の関係が異なるのはなぜだろうか。家族観 2 次元[一体感][個人領域]の関係が、低学歴群では対立関係に、高学歴群では独立であったことを考えあわせるならば、次のように解釈できよう。ひとつには、低学歴群は、例え個人領域を認めても、個人としての生き方に多くの資源を投入することで家族の一体感が損われると考え、個人領域を認める家族観が実現されにくいのかもしい。一方高学歴群では、母親が個人領域を持つことと家族の一体感の強さとは別の次元と捉えるために、個人領域の価値観の強さが実際の資源配分として実現されやすいのではなからうか。あるいは、低学歴群は高学歴群に比べ、個人としての自分を活かすことへの具体的な手段知識や機会が少ないために、価値観として個人領域を認めてもその実現が難しいのかもしい。

では、家族観と関連する資源配分項目は、学歴によってどのように異なるだろうか。家族観と資源配分項目との関係を見てみよう (Table 5)。家族の一体感と関連する資源配分項目は、低学歴群では身の回りの世話という道具的世話と話を聞く、期待に応えるという情緒的世話がともに関連しているが、高学歴群では情緒的世話のみが関連している。このことから、家族への道具的世話の提供が家族の一体感に不可欠との考え方は、高学歴になるほど弱まることが示唆される。

Table 5 家族観と家族の関係性への資源配分項目の相関
(学歴別)
(値は相関係数)

	一体感	個人領域
夫の身の回りの世話	.251 .362*	
夫の話を聞く	.256 .382*	
夫の期待に応える	.361* .341*	
親からの期待に応える	.170 .382*	-.222 -.321*

注: 上段は大卒 下段は高卒
* p<.05 ** p<.01

(3)妻の家計負担割合による家族観と資源配分の関連の違い

前述のように家計費負担割合は、家庭内の事柄の最終決定権を強める。また、家族の関係性の構築・維持のための世話はその内容により時間的拘束が異なり、道具的世話の提供は情緒的世話の提供に比べ、時間資源を多く必要とする。このことは、どのような資源を家族の関係性に配分しているかが、家計費負担割合によって異なることを予測させよう。そこで家計費負担割合の違いが、家族観と資源配分の関係をどのように変えているかを検討した。

妻の家計費負担割合別に家族観と資源配分の関係をみたところ、低負担群も高負担群もともに、[一体感]と[家族の関係性に配分] (低負担群 $r=.254, p<.10$; 高負担群 $r=.548, p<.05$), [個人領域]と[自分の生き方に配分] (低負担群 $r=.324, p<.05$; 高負担群 $r=.518, p<.05$) との間に有意傾向及び有意な相関関係が見られた。つまりそれぞれが自らの家族観と対応した資源配分をしているといえる。

では、家族の関係性に配分する資源のうち、どのような内容の資源が家族の一体感を強めるかは家計費負担割合によって異なるだろうか。家計費負担割合別に、家族観と資源配分の項目との相関を検討した(Table6)。その結果「夫の話を聞く」が[一体感]と正の相関関係にあることは両群共通であるが、低負担群では「夫の身の回りの世話」が[一体感]と正の相関関係に、[個人領域]とは負の相関関係にあった。高負担群では「夫の身の回りの世話」と家族観2次元との関係はみられなかった。

Table6 家族観と家族の関係性への資源配分項目の相関
(妻の家計費負担割合別)
(値は相関係数)

	一体感	個人領域
夫の身の回りの世話	.330* .287	-.330* .134
夫の話を聞く	.363** .690**	

注: 上段は家計費低負担群 下段は高負担群
* p<.05 ** p<.01

[一体感]と[家族の関係性に配分]とが正の相関関係にある点では家計費負担割合による違いはな

いものの、どのような資源を配分するかが両群で異なることが明らかになった。家族の一体感を強めるために、高負担群は主に「夫の話を聞く」など情緒的世話に心的エネルギーを配分するのに対し、低負担群は情緒的世話だけでなく道具的世話にも多くの資源を配分することが明らかになった。

身の回りの世話は生活全般にわたり際限がないため、ほぼ一日中時間資源を必要とする。夫がいない時間も、献立や不足している物やスケジュールなどについて注意を払う必要があり、心理的エネルギー資源も時間資源もそのために費やされる。そのため自分の自由になる時間は家事や家族の世話を万端にした残りの時間となり、まとまった時間を自分の予定に合わせて取ることは難しい。一方「夫の話を聞く」という情緒的世話は心理的エネルギー資源を必要とするが、これに要する時間は、例えば夕食後や休日など時間がある程度限られる。また、夫がいない時間は情緒的世話のために拘束されることがない。このようなことから、家計費高負担群は家族の関係性と自分の生き方とに同程度の資源配分ができるのではなかろうか。

まとめ

戦後、家族が公的領域から私的領域に変化する中で、女性にとっては家族は半ば公的領域、つまり職場であり続けたことが指摘されている（例えば目黒，1987）。家族という私的領域の中で、家族の世話をするのは長らく女性の役割であった。また母親の満足や生きがいは、家族の世話をし家族の満足を通して得られるはず、個人としての生きがいを求めるのは自己中心的な生き方との家族観は、女性自身の中にも根強いのではなかろうか。また、母親となった女性が、家族ではなく自分の生き方に多くの資源を配分することは、家族の絆の弱体化につながるとの見方もある。このような家族観は、既婚女性が自分の生き方に十分な資源を配分することを困難にするであろう。

少子・長寿命化という人口革命は女性の高学歴化や社会の変化とあいまって女性のライフコースを大きく変えた。今日の成人期女性における人格発達は、家族・母親としての発達と個人としての発達の両面から見ていくことが必要であろう。30代から60代の母親を対象に行った調査では、家族役割以外の個人としての生き方を持ちたいとする個人化志向は、世代・学歴・職業の違いに関わらず、いずれの層でも非常に高いことが報告されている（柏木・永久,1999）。この結果は、中年期以降の既婚女性が、個人としての生き方を持つ重要性を強く認識していることの反映であろう。しかし、家事・子育てのほとんどを女性が担っている今日の状況を考えれば、個人としての生き方を持つ重要性の認識は、あくまでも理想にとどまり現実のあり様とは異なると推測される。個人としての生き方を持つことへの態度は価値観の測定だけでなく、実際の行動面からも見ていく必要がある。

人が持つ時間資源や心的エネルギー資源は個人の中では有限である。母親が家族役割以外の個人としての生き方を実際に求めるならば、家族の関係性を構築・維持する役割と個人としての生き方との関係は、「家族か個人か」という対立関係になる可能性がある。このことは、母親が個人としての生き方への資源配分を増加させることは家族の関係性のための資源配分を減少させ、家族の絆を弱めるとの見方につながる。

近年の少子化の背景には、女性側の結婚・出産による自身のための資源配分の減少を回避したいと

の思いがある（柏木・永久,前出、永久・柏木 2000）。本研究では、自分自身の生き方にも家族と同程度に資源配分ができるのは、どのような家族のあり方であるかを検討した。

本研究の結果から、家族の一体感と個人としての生き方とは低学歴群では対立関係であるのに対し、高学歴群では独立の関係にあることが見出された。また高学歴群及び家計費高負担群では、家族の関係性は家族の身の回りの世話など時間資源を多く必要とする道具的世話よりも、夫の話を聞く、夫からの期待に応えるなど、心的エネルギー資源の比重が重い情緒的世話によって強まると考えていることが示唆された。すなわち、家族との関係性の構築・維持に心的エネルギー資源を中心に配分することで、より多くの時間資源を自分個人のために配分できることが、家族の一体感と自分個人としての生き方とは独立だという家族観の背景になっていることが示唆された。

高学歴群家計費高負担群における家族の道具的世話への時間配分の減少は、どのようなことによるのだろうか。家事は、家電製品の普及や、既製服・調理済み食品の普及や家事代行サービスなど家事の外部化により、熟練した技術や個人の能力が発揮される仕事から誰にでも同じようにできる仕事に変わった。今日の家事のやりがいは、その出来ばえによる母親への評価や満足感ではなく、家族が喜ぶなどの愛情表現としての満足感である（山田,1994）。家族の道具的世話に必要な時間資源はどれほど家電製品を利用し外部化させるか、または家族がどれほど家事をするか、家族メンバーに過剰な世話をしないことで減少させることができる。しかし、道具的世話に愛情表現や自己の存在価値という意味を付与している限り、母親がそこに配分する時間資源は減少しないであろう。

高学歴群・妻の家計費高負担群では、母親による道具的世話が家族の一体感に不可欠との考え方が弱まっているだけでなく、家族との情緒的つながりや個人としての生き方の中に自己の存在価値を認めているのではなからうか。そのことが、「話をきく」「夫の期待に応える」などの時間資源をあまり必要としない情緒的世話の比重を強め、家族の関係性と同程度の時間資源を自分個人の生き方にも配分できることと関連すると思われる。

このような母親の変化は、とかく家族の絆の弱体化につながるとの危惧を持たれる。本研究の結果は、子育て役割がほぼ終了した母親においても、また自分の生き方への資源配分が多い群でさえ、その量は家族の関係性への配分と変わらないことを示している。母親が個人としての生き方を持つことは、本研究の結果を見る限り、家族の絆や家族への関心を弱めることを意味するのではない。道具的世話役割が女性に偏ってきた中で、これまで既婚女性がほとんど配分できなかった自分の生き方への資源配分が、やっと可能になりつつある家族のあり方と解釈できるのではなからうか。

本研究では、子どもの教育やいい母親であろうとすることという、子育ての情緒的世話の項目は、[家族の関係性に配分] [自分の生き方に配分]のいずれにも高い負荷があり、因子分析によって分類することができなかった。このことは、中年期の母親にとっての子育ては、子どもという他者のための資源配分であると同時に、個人としての自分の楽しみや生きがいでもあるなど、分かちがたい意味を持つことを示している。これは、母親における子どもの価値の中で、「自分が成長する」「子育てという経験をしてみたい」などの個人的価値が最も高かった（柏木・永久,1999）ことと対応する。母親における子育ての意味がどのようなものであるのかを、さらに検討する必要がある。

また本研究では、中年期以降の母親において、個人としての生き方を持つ重要性が高まるとの前提

から家族のあり方を考えてきた。しかし、家族の関係性と個人としての生き方への資源配分が、女性の心理的発達においてどのような意味を持つのかを、縦断的に見ていくことも必要であると思われる。

引用文献

- ベネッセ教育研究所. (1997). *子育て生活基本調査報告書*.
- 博報堂生活総合研究所. (1989). *90年代家族：お金の流れが家族を変える*.
- 平山順子・柏木恵子. (2001). 中年期夫婦のコミュニケーション態度. *発達心理学研究*, 12(3).
- 柏木恵子・若松素子. (1994). 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み. *発達心理学研究*, 5(1), 72-83.
- 柏木恵子. (1998). 社会変動と家族発達. 柏木恵子(編), *結婚・家族の心理学*. ミネルヴァ書房.
- 柏木恵子. (1999). 社会変動と家族の変容・発達. 東洋・柏木恵子(編), *社会と家族の心理学*. ミネルヴァ書房.
- 柏木恵子・蓮香園. (2000). 母子分離＜保育園に子どもを預ける＞についての母親の感情・認知. *家族心理学研究*, 14(1), 61-74.
- 柏木恵子・永久ひさ子. (1999). 女性における子どもの価値. *教育心理学研究*, 47(2), 50-59.
- 木村清美. (2000). 家計の中の夫婦関係. 善積京子(編), *結婚とパートナー関係*, 7章. ミネルヴァ書房.
- 厚生省. (1998). *厚生白書(平成10年度版)少子社会を考える*.
- 牧野カツコ. (1983). 働く母親と育児不安. *家庭教育研究所紀要*, No.4, 67-76.
- 目黒依子. (1987). *個人化する家族*. 勁草書房.
- 目黒依子・矢澤澄子. (2000). *少子化時代のジェンダーと母親意識*. 新曜社.
- 永久ひさ子. (1995). 専業主婦における子どもの位置と生活感情. *母子研究*, 16.
- 永久ひさ子・柏木恵子. (2000). 母親の個人化と子どもの価値. *家族心理学研究*, 14(2), 139-150.
- 大日向雅美. (1988). *母性の研究*. 川島書店.
- 岡本祐子. (1999). *女性の生涯発達とアイデンティティ：個としての発達・かかわりの中での成熟*. 北大路書房.
- 総理府. (1992). *男女平等に関する世論調査*.
- 杉村和美. (1993). 現代女性の中年期：＜アイデンティティ＞の視点から. *発達*, 54, 37-44.
- 鈴木淳子. (1987). フェミニズムスケールの作成と信頼性・妥当性の検討. *社会心理学研究*, 2, 45-54.
- 鈴木淳子. (1991). 平等主義的性役割態度：SESRAの信頼性と妥当性の検討および日米女性の比較. *社会心理学研究*, 6, 80-87.
- 若松素子・柏木恵子. (1994). 「親となること」による発達：職業と学歴はどう関係しているか. *発達研究*, 10, 83-98.
- 山田昌弘. (1994). *近代家族のゆくえ*. 新曜社.

< 付 記 >

本研究は、平成11～13年度 科学研究費（課題番号11610138）の補助を受けて行った。